

2022年2月13日（日）「アブラハムの子孫」

ガラテヤ 3:6-9

6 それは、「アブラハムは神を信じた。それが彼の義と認められた」と言われているとおりです。7 ですから、信仰によって生きる人々こそアブラハムの子孫であるとわきまえなさい。8 聖書は、神が異邦人を信仰によって義とされることを見越して、「すべての異邦人があなたによって祝福される」という福音をアブラハムに予告しました。9 それで、信仰による人々は、信仰の人アブラハムと共に祝福されるのです。

【序論】

私たちの人生は「出会い」によって形成されていると言っても過言ではないでしょう。親、兄弟、友、恩師、配偶者、子ども、同僚……。私の場合、教会の皆様との出会いもまた大きな位置を占めてきました。「この人と出会っていなければ今の自分はなかった」と言える幸いを、大なり小なり誰もが経験してきたのではないのでしょうか。私たちが信じる事柄の背後にも、その教えの基である誰かがいるはずです。キリスト者にとってそれは救い主イエス・キリストであり、この方が自分のために何をしてくださったのかを知って、聖書のことばを信じるようになりました。聖書を読み進めてまいりますと、「信仰の父アブラハム」という人物とも出会うことになります。イスラエル民族の父祖アブラハムと私たちとの間にどんな関わりがあるのだろうか。いえ、それ以上に、神とアブラハムがどういう人格的な関係を結んだかが重要なのです。なぜなら、アブラハムが信じたと同じ神を私たちも信じているからです。アブラハムとは、その意味で私たちの「信仰の父」と呼ばれるのです。

【本論】

本論 1. 信仰義認の出元

それは、「アブラハムは神を信じた。それが彼の義と認められた」と言われているとおりです。(3:6)

ここ3章には、旧約聖書からの引用が数多くあります¹。パウロによる旧約聖書の引用

¹ 6節（創世 15:6）、8節（創世 12:3）、10節（申命 27:26）、11節（ハバクク 2:4）、12節（レビ 18:5）、13節（申命 21:23）

の仕方は、文字通りの抜粋ではなく、解釈によって一部変更されていることが多い（当時はそのような引用の仕方が通例であった）。また、この時代に読まれていた「七十人訳聖書」（ギリシャ語訳旧約聖書）から引用されていることも少なくありません。

まず、ここ5節では創世記15章の記事が引用されているのですが、これは有名な「アブラハム契約」と呼ばれる場面です。神とアブラハムとの間で契約が交わされ、誓いの儀式が行なわれました。しかもそれは、神の側が一方的に約束を守ることを意味した契約でした。まだ子どもがいなかったアブラハムに対して、神は、彼自身の子が生まれ、しかもその子孫は空の星のように増え広がると約束されたのです。既に夫婦ともに老齢となっていたアブラハムとサラでしたが、生物学的にはほぼ不可能なこの約束を彼は信じました。そして、その信仰が「義と認められた」。この時点で、アブラハムは神に認められるような立派な行ないを特にしてはいません。「信じた」ことが義の根拠となったのです。

パウロがここでアブラハムの信仰を取り上げるのは、自分が主張している「信仰義認」の教理はパウロが勝手に考え出した思想なのではなく、イスラエル史の最初期から連綿と流れ来るものであることを明らかにするためでした。パウロは主イエスと出会ったことにより、聖書の読み方が根本的に変わり、この書物は「信仰義認」で一貫しているということに気づいたのです。

私たちの中にも、知らずして信じ続けてきた「真実ではない事柄」があるかもしれません。教科書に書かれていることそのものが正しいとは限らず、そこには誰かを守るための「解釈」が入っていたり、知られては困ることは書かれていなかったりするかもしれないからです。「本当はどうだったのか」を自分の目を見て調べ、探求する必要があります。パウロはユダヤ人の通念を脇に置き、「イエスの十字架」を軸に聖書全体を再解釈しました。

ですから、信仰によって生きる人々こそアブラハムの子孫であるとわきまえなさい。(3:7) アブラハムは、正しい行ないを積み上げることによってではなく、信仰によって神の御前に義とされました。「義認」ということばには、本来は義と認められざる者、罪ある者に一方的に与えられる「恵み」という意味が込められています。より強い表現では「宣義」であり、有罪者を義と宣言することを意味します。

本論2. 歴史上の変遷

しかしながら、アブラハムの時代にこの思想が既に存在したとはいえ、その後のイスラエル史においてそれは著しく異なる理解へと進んで行ったことを理解する必要があります。

ります。ユダヤ教において「義認」とは、アブラハムの「正しい行ない」に基づくと考えられるようになりました。その根拠となりやすいいくつかの出来事はなきにしもあらずなのです。例えば、アブラハムは主の命により、この世的には何の保証もないところで移住が求められたとき、無条件に従っています（12:1-5）。また、後に息子イサクをささげるよう命じられたとき、彼は断腸の思いでその命令に従ってモリヤの山へ行き、実際にイサクをささげる寸前に御使いによって止められました。これらの行為は、確かにアブラハムが「正しい行ない」によって義とされたことの根拠となりそうです。

こうして旧約ユダヤ教では、救いは「正しい行ない」が根拠になるという基本的な考え方が出来上がっていきました。更に、このアブラハムの「正しい行ない」は、子々孫々にまで受け継がれるものとして、「アブラハムの血筋」であることが特別な意味を持つようになっていったのです。このように見ていきますと、「救い」というものが個人的な神との関係というより民族的なものであると考えられていたことがよく理解できるでしょう。つまり、「イスラエル民族に生まれる」ということが決定的な救いの根拠として捉えられてしまったのです。その証拠となる聖句を挙げてみましょう。

- ・ 彼らは言った。「私たちはアブラハムの子孫です。今まで誰かの奴隷になったことはありません。『あなたがたは自由になる』とどうして言われるのですか。」（ヨハネ 8:33）
- ・ 彼らが答えて、「私たちの父はアブラハムです」と言うと、イエスは言われた。「アブラハムの子なら、アブラハムと同じ業をしているはずだ。」（ヨハネ 8:39）

これらの箇所を見てみますと、ユダヤ人たちが「(血筋としての) アブラハムの子孫」であることを誇りとし、救いの根拠としていたことがよく理解できます。イスラエル共同体に属していなければ話にならない。個人の救いはまず共同体の一員であることが前提としてあるものだったのです。では、具体的にどうしたらその特別な共同体に入ることができるか。それが「割礼」でした。割礼を受け、外的なしるしを得ることによって、その人は「ユダヤ人」に仲間入りすることができたのです。ガラテヤ教会のユダヤ主義者たちがどうして異邦人に割礼を求めたのか、その背景が分かってくるでしょう。ところが、パウロよりも先にこのことに激しく反対した人がいたのです。バプテスマのヨハネです。ヨハネは、「あなたがたは民族的な血筋に安住している場合ではない」「神への真の従順こそが求められるのだ」と教えていました。

ヨハネは、ファリサイ派やサドカイ派の人々が**大勢**、洗礼を受けに来たのを見て、こう言った。「毒蛇の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、誰が教えたのか。それなら、悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。言うておくが、神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。

(マタイ 3:7-9)

ヨハネのメッセージは「血筋としてのイスラエル」を救いの根拠とする考え方を一刀両断にしました。しかし、それでも尚、彼のメッセージには「正しい行ないによる義」の雰囲気はどこか残っている気がしなくもありません。

本論 3. 異邦人に臨んだ祝福

パウロは聖書の原点に立ち返ります。そもそも、人は「正しい行ないによる義」を得ることに失敗した存在ではなかったか。人類の始祖アダムにして、神との契約を破ったのではなかったか。そして、アブラハムとて、神の約束に立ち続けることができなかつた人ではないか。アダムは禁断の木の実を食べ、アブラハムは幾度となく神の守りを信じぬ態度を示しました（創世 12:10-20、16:1-9、20:1-18）。不忠実な人間に対して恵みを注いでくださる神。その恵みに依り頼むことこそが信仰であるというのが、聖書のメッセージだったのです。

聖書は、神が異邦人を信仰によって義とされることを見越して、「すべての異邦人があなたによって祝福される」という福音をアブラハムに予告しました。（3:8）

ここでは、創世 12:3 の聖句が引用されています。実際の箇所と比較してみましょう。

主はアブラムに言われた。「あなたは生まれた地と親族、父の家を離れ私が示す地に行きなさい。私はあなたを大いなる国民とし、祝福しあなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福の基となる。あなたを祝福する人を私は祝福しあなたを呪う人を私は呪う。地上のすべての氏族はあなたによって祝福される。」（創世 12:1-3）

ここでは「氏族」と訳されていますが、ヘブル語原文で使われていることばは「הַקְּפָוֶה / ミシュパーハー」で、「家族」「部族」「国」などと訳すこともできます。ガラテヤ 3:8 では敢えて「異邦人」と訳し直されている点に注目しましょう。これはパウロ特有の解釈ではありますが、アブラハムを軸として異邦人全体に祝福が及んでいくというふうに彼は読んでいるのです。つまり、従来のユダヤ教の考え方のように、「民族内の救い」に狭く留まるものではなく、神の救いのご計画は最初から世界規模であったということを言おうとしている。アブラハムが信仰によって義とされたのであれば、全世界の民も同じ信仰によって義とされるのだ。

旧約ではよく「祝福」ということばが用いられますが、新約において用いられる「救い」とほぼ同義と捉えてよいでしょう。旧約においてはまだぼんやりとした姿ではありましたが、やがてキリストによって成就される「救い」がこの時から既に予告されていたのです。

それで、信仰による人々は、信仰の人アブラハムと共に祝福されるのです。（3:9）

【結論】

パウロがここで読者に伝えたいポイントがあります。それは、神の救いの手段は如何なる時代にあっても変わらないということです。アブラハムが恵みによって救われたのであれば、ガラテヤ教会が存立していた第一世紀も同じです。「正しい行ない」によって設立された教会ではなかったのです。そして、2000年以上経った今も、福音の本質は変わることがありません。私たちは「恵みによる義」「信仰による義」によって立っている教会です。私たちが自分の「正しい行ない」によってしか救われないとしたら、そこに希望はありません。私たちは神の御前に正しくはあり得ないからです。しかし、主イエスの義を身にまとうことができるようになりました。罪深い私たちは、キリストの義の衣を着て、聖なる神の御前に立つことができるのです。

【祈り】

人の業によってではなく、主イエスの義によって贖いを成し遂げてくださった天の父なる神様。救いの基があなたの側にあるからこそ、私たちは安心してこの人生を委ねることができます。いつ如何なるときにも、私たちには帰っていくべき場所があります。慈しみ深いあなたの懐こそ、私たちの住まいです。この教会もまた、常にあなたの臨在に満ち溢れていることができるように、多くの人の帰るべき家であることができるよう、導いてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
アブラハムを召し出し、全世界の祝福の基となし給うた、父なる神の愛、
人の業によらず、ご自身の義によって、罪ある者を贖い給う、主イエス・キリストの恵み、
信者一人びとりを神の宮となし、教会を帰るべき家となし給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。